［論　文］

歴史児童文学に見られるキリスト教
― かつおきんや『あらしの中の十七年　－長屋八内のご一新－』論 ―

Christianity on a Historical Juvenile Literature
－“Seventeen Years in the Storm” by Kinya Katsuo－

中　島　賢　介*

要旨

本論は、歴史児童文学作品の一つである『あらしの中の十七年　－長屋八内のご一新－』について、歴史児童文学、郷土文学、キリスト教児童文学といった視点から考察したものである。作者であるかつおきんやがなぜ明治維新を長屋八内という人物を通して描いたのかを作品分析や本人からのインタビューによって明らかにした。その結果、時代の激流に翻弄されながらも、八内が浦上配流キリシタンとの関わりから信仰に導かれたことに、配流キリシタンの悲劇性のみを扱った他作品とは異なる点があるということが分かった。

キーワード：歴史児童文学／郷土文学／キリスト教／浦上四番崩れ

はじめに

北陸のキリスト教は、江戸期まで加賀藩の徹底したキリシタン禁制により、キリシタン根絶政策いわゆる「根切り」が行われたことにより、一旦は途絶えたかに見えた。しかし明治期に入り、トマス・ウィン宣教師らの宣教活動が実を結び、キリスト教が新たな歴史を歩むことになったということは紛れもない事実である。それにしても、宣教師の教えを受け入れた当時のキリスト教徒はいかなる心境で信仰生活を送っていたのであろうか。

また、浦川和三郎『浦上切支丹史』をはじめとし、浦上キリシタンの配流いわゆる「浦上四番崩れ」の歴史を描いた作品のどれもが、西日本各地で拷問や改宗を迫られるなど悲惨な生活を強いられたという事実を描いている。しかし、どの作品もその事実をいかに正しく伝えるかということに力点が置かれていて、その事実が各地方の人々にどのような影響を与えたかという点については触れられていない。つまり、配流の当事者側を中心にしか描かれていない。

果して、三千人以上もの浦上の人々を見て、彼らを受け入れた各地の反応はどうだったのか。皆が彼らに対して否定的な見方をしていたのであろうか。現在でも金沢で食されている「ドジョウのかば焼き」は当時のキリシタンが売り歩いていたことなどを含めて、現在においてもキリシタンが北陸の地に与えた影響は少なからず存在している。今回取り上げるかつおきんや『あらしの中の十七年』は、浦上キリシタンを監督する立場にあり旧上級士族であった主人公長屋八内がキリシタンとの関わりを通して明治維新によって失いかけた生きがいを取り戻していく物語である。そして、後日談として八内が受洗し今度は自らが民衆の迫害に遭いながらも信仰生活を全うしたということが語られている。

八内という人物の生き方から何を学ぶことができるか。そして、浦上キリシタンが自分たちの生き方を通して社会に与えた影響は何か。今回は影響を受けた側の視点から『あらしの中の十七年』を考察したい。

ところで、歴史児童文学には巷間に知られた事

＊ NAKAJIMA, Kensuke
北陸学院大学　人間総合学部　幼児児童教育学科
日本語表現法・保育実習（施設）

件や人物などを取り上げ、読者である子どもに人間の生きざまを伝える伝記ものがある。その一方、今西祐行『肥後の石工』のように、一地方における一人物に焦点を当てて、具体的な史実に基づいて話が展開する作品も数多く存在する。

本論が取り上げるかつおきんや『あらしの中の十七年　－長屋八内のご一新－』[1]は後者に属し、北陸における幕末から明治維新の様子が主人公長屋八内の生き方を通して描かれている。

今回は、歴史児童文学のストーリーを組み立てる上で史実と創作がどのように織りなされているかといった点に着目して作品分析を試みる。また、なぜ激動の明治維新を描くために長屋八内という人物を選んだのかを作者へのインタビューを交えて考察する。さらに、主人公八内がのちにトマス・ウィン宣教師から洗礼を受けキリスト者となるという後日談が添えられていることから、これまでの浦上キリシタンを取り上げた作品にはなかったキリスト教児童文学作品として位置付けられるかといった点についても考察する。

Ⅰ　作品のあらすじと成立背景

主人公長屋八内[2]は、二千三十石を俸禄している上級の加賀藩士である。第一章では、八内が岡田雄次郎とともに高岡町奉行として安政五年に起こった高岡の打ちこわしを吟味し見事に解決する。第二章では、八内は藩内に蔓延っていた贈収賄の悪癖について上司に進言し、藩主の命にて甲冑をつけての馬ぞろえに参加する。その後、諸外国からの侵略に備えて海防策を提案し、その責任者を任される。第三章では、八内は宮腰町奉行として町民たちと寺中屋の火事の消火活動を行い、村井飛騨守の命で水戸天狗党を降伏させ幕府に引き渡す仕事に携わる。第四章では、京都詰めを命じられた折、薩摩藩士の内田三之助と知り合い、幕政が終焉を迎えつつあることを知る。京都へ同行した八内の次男平次郎が武芸所の射撃大会で全国二位を獲る。金沢に戻って平次郎は家老らにその腕前を認められ藩主の長男の指南役に命じられる。その後版籍奉還が起きる。第五章では、明治維新により八内は禄高を大幅に減らされ生活に困窮する。藩主慶寧が上京し士族は没落していく。ある日岡田雄次郎と元薩摩藩士で現在金沢大参事として着任した内田三之助[3]から卯辰山の配流キリシタンの監督要請があり承諾する。貧しい生活を強いられていたキリシタンの生活を救済しようと、当時田畑に大量に生息していたドジョウをかば焼きにして売り出すことを提案する。その後キリシタンとの心温まる交流があり、やがてキリシタン禁制の高札が外され卯辰山から長崎への帰郷をゆるされたキリシタンとの別れがあり物語が結末を迎える。先述したが後日談としてその後八内は宣教師から北陸でのクリスチャン第一号になり、次男平次郎（後に巻と改名）も洗礼を受けて伝道者として活躍するという文章が添えられている。

作品のあとがきにおいて、かつお長尾八内という人物を史料で初めて見たのは『安政五年七月十一日』の取材中であったと述懐している。八内の人物像を構想しながら、彼は「明治維新が人びとにとってどんなものだったか」というテーマも問い続け、八内を通して明治維新を描こうという作品を発想するに至った。

作品の解説で岩崎が指摘しているとおり、かつおはすでに『天保の人びと』(1968)、『安政五年七月十一日』(1970)、『山から声が降ってくる』(1970)など江戸末期の加賀藩における一揆をテーマにした作品を書いており、そのいずれもが庶民の子どもたちを主人公に据えている。だが、高岡の打ちこわしに始まる幕末から明治初期を描いた『あらしの中の十七年』は主人公を上級武士にしている。これは、明治維新において一番生活の転換を余儀なくされたのが武士階級であった。新政府の役人になった一部を除き、没落の一途を辿ったのが士族であった。一番の被害者、それは藩主に忠誠を誓い、藩政のため職務を全うした八内のような武士であった。かつおはそのことに着目し、八内を中心にした明治維新を描いたということができる。

Ⅱ．史実と創作

かつおが物語創作にあたり参考にした文献は、あとがきに『加賀藩史料』、『石川県史』、『高岡市史』、『水戸浪士西行録』[4]、『浦上切支丹史』、『長尾巻物語』その他と記されている。ここに挙がっている文献などを参照しながら一つ一つ検証して

いきたい。

第一章の高岡の打ちこわしについては、『高岡市史』に一連の事件の経緯が「安政五年（一八五八）の暴動は全藩に波及し、わが高岡でも空前の大掛りなものであった。」という一文から始まり、詳細に記述されている。米価が高騰し町民が騒ぎ出したこと、町年寄町肝煎等が協議して、当時金沢の算用場に詰めていた岡田雄次郎と長屋八内に連絡する。奉行は貧民救済の命を下し、それを受けて篤志家も金銀を寄付するということで一旦は沈静化する。しかし、更なる米価高騰の流言飛語が飛び交い、打ちこわしが起った。算用場から六百石の米と一人当たり四文ないしは三文分の賃金を手当てを引き出すことに成功して八内はようやく高岡に戻る。打ちこわしについては、翌日岡田が奉行を役儀指除となり職務を離れ、後任の加藤九兵衛が着任するまで実質一人で善後処理に当ることになった。『高岡市史』では、対応に追われた八内ににについて次のような解説を加えている。

> 八内は、食禄約二千石、歴代奉行中屈指の高禄の士で、貫禄に申分がなかったのみならず、至誠と愛情に満ちた模範的な牧民の能吏で、責任を一身に負うて、極力町民をかばった。加藤奉行もまた良き補佐役として力を協せ、高岡からは一人の犠牲者も出さなかったのは、誠に見事であったといわねばならない。　（p．821）

結局、高岡の町中からは一人も咎めを受けなかったことが、八内の名声を高める契機となったことが史実からも明らかになっている。さまざまな史実に八内が登場するが、この『高岡市史』における八内像がかつおにつよく影響したと考えられる。

その一方で、その三では史実には見られない八内のエピソードが挿入されている。八内が忍びで城下を視察する場面である。実際に街中に出て古着屋や間右衛門の母親らしき女性、仏具屋甚右衛門などに会い、城下の様子を自分の目で確かめるという行為については他の文献のどこにも記されていない。これは、かつおの「私の想像にたよらざるをえ」ないことの一つであると考えられる。ただ、エピソードの一つである、八内が打ちこわしの際に馬で駆けつけ、「火事はもう消えたから、家は潰さなくてもよい」と叫んだという話は物語には挿入されていない。これは、『高岡市史』において八内は事件当夜金沢にいたという事実を挙げてエピソードそのものを否定していることが影響しているものと思われる。

岡田雄次郎という人物は第二章以降もしばしば登場するが、幕末から明治維新にかけて特筆すべき人間である。五百石の禄高である中士であったにも関わらず、金沢藩の参政、大参事に登用されている。『乾州岡田君行状』によれば、この大抜擢の背後には江戸に遊学後、中央政府との人脈に通じていたことが推察できる。

第二章の甲冑ぞろえでは、藩主慶寧が藩内の人持組の訓練を視察するという事実は『加賀藩史料』からも明らかである。しかし、長屋家の当主が妻に代々甲冑を手入れさせていたという事実は史料からは読み取れない。また、銃卒隊の訓練の際に、再び岡田雄次郎が登場するが、八内とともに隊の編成について議論する光景などもかつおが挿入したエピソードである。後述するが、これらは岡田が度々登場することで第五章の浦上キリシタンの監督を依頼するという重要な場面への布石になっている。

第三章では、水戸天狗党が越前藩の領地まで西行してきたために加賀藩が迎撃するとの命を受けた場面があるが、天狗党に対する加賀藩の対応については『水戸浪士西上録』に詳しく記録されている。ただし、怪我の手当をしたエピソードそのものが見当たらない。

第四章では、八内が混乱している幕末の京都詰めの仕事を仰せつかった場面がある。八内はふとしたことから、薩摩藩士の内田三之助と出会う。この出会いも、先述したキリシタンの監督就任依頼に訪れた内田や岡田雄次郎との再会の布石となっている。実際に八之門が内田と会話した場面はかつおの創作であると思われる。ただ、八内の次男平次郎が藩主慶寧の長男多慶若の銃術指南にあたっていたことは、平次郎こと長尾巻自らが『歓喜の聖徒　長尾巻物語』の中で述懐しているとおりである。しかし、八内が八之門に改名するのは実際には廃藩置県が行われた時であるので、改名の時期については異同がある。

第五章では、明治維新によって武士という身分がなくなり、八内は屋敷を引き払い道具類を売り

払いながら生計を立てていた場面がある。今でも小橋近くに金沢商業学校跡地があるが、この地に八内の屋敷があったとの記録がある。武士の生き方が捨てきれないでいる八内の所に、内田三之助と岡田雄次郎が訪れるという場面は実に劇的ではあるが、史実ではない。二人は八之門に浦上四番崩れという配流キリシタンの監督役着任を要請するという話になっているが、これには監督をしたという説と八之門の家来の三好弥左衛門が監督をしていた説、遠重という布教師が長尾邸の草取りに来ていたという説がある。いずれにせよ、キリシタンの生活を垣間見る機会はあったということであるが、八内がキリシタンにドジョウの蒲焼を売らせたという事実は確認できない。ただドジョウの蒲焼は、現在でも金沢の名物の一つであり、その起源はキリシタンが売り歩き非常に好評だったという説が有力である。物語では八内がキリシタンとの関わりを通して武士の甲冑や脇差にこだわることをやめたということになっている。実際、八内はトマス・ウィン宣教師が来沢するまで酒造販売に携わったが運搬船が嵐に会い一文無しになったという話が語り伝えられている。

これまで見てきたように、八内の存在や禄高、業績などはほぼ一致してはいるが、それぞれのエピソードにどれほど八内が関与しているかについては、章ごとに濃淡があり史実かどうか判断できない事柄もある。

八内の人物像についてであるが、信仰面は後述することとして、町奉行でありながら高岡の町内を歩いては町民の声を直接聞く、宮腰町内で起こった火事に遭遇した際町民とともに消火活動にあたる、卯辰山の開拓事業には身分を隠して人足の一人として参加する、などといった一連の行為は、名奉行として知られる大岡忠相や遠山影元を彷彿とさせる。大岡や遠山の名奉行ぶりが誇張され劇化されたことは周知の通りであるが、高岡における八内についても同様の現象が起きている。そのことは先述した『高岡市史』などからも事実であり、高岡市内にある油町地蔵尊堂に掲げられている次の案内板からも確認することができる。

> 此ノ處安置ノ地蔵尊ハ往古油町先雄神川ノ深淵ヨリ出現マシマセルモノニテ土民ノ崇敬篤ク霊験亦著シク在ハセシ由ナリ天保ノ大饑饉ニ於ケル高岡町奉行半甲左門并ニ安政ノ名奉行長屋八内ノ賑恤ヲ徳トシテ後年七月二十四日北部ノ町民ハ報恩感謝ノタメ此ノ地蔵尊前ニ供養法要ヲ営ミシヨリ各町コレニ習ヒテ今ニ至レルモノヽ由ニテコレ高岡ニ於ケル地蔵祭ノ濫觴ナリトイフ

Ⅲ．物語におけるキリスト教性

この物語は、タイトルと副題が示す通り、時代の激動期すなわち幕末から明治維新までの十七年を長屋八内がどのように生きたかを描いた作品である。主人公長屋八内は、袖の下によって商人に便宜を図ることが当然かのように振る舞う坂井三郎兵衛のようなタイプでもなければ、中央政府と加賀藩とのパイプ役となった岡田雄次郎のように新しい波に乗るようなタイプでもない。ましてや、時代に取り残され周囲からの施しを受ける酔っ払いの武士でもなかった。八内は、ただ藩主から自分に課せられた任務に忠実でありたいと思い生きてきた。こうした八内自身がこの十七年で思案してきたことを引用してみよう[5]。

第一章

> もとはといえば、まつりごとがまずいからだ。だから、あれたちの罪をあばきたてて罰をあたえるのは、すじもちがうし、それでは彼らになにものこらぬことになる。こわした間右衛門たちにも、こわされた関屋たちにも、それぞれに自分のあやまちをみとめさせたい。そのうえで、なんとかして罪人をださないようにしたいものだ。それにはどうすればよいだろうか。
>
> （下線は論者）（p.42）

これは、ヨハネによる福音書８章のいわゆる「姦通の女」の例話に通じるものがある。

> 「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」

イエスは姦通を犯した女の罪も、女を引き出した律法学者やファリサイ派の人々の罪をも咎めなかった。八内は打ちこわしに加わった間右衛門たちも打ちこわしの原因となる米価引き上げを画策した関屋忠右衛門も形式的な処罰を与えたものの、高岡では打ちこわしそのものがなかったことにすることで両者を無罪としその責任を取らせることはしなかった。ここに八内の「許し」がある。

「姦通の女」の箇所でも、イエスは、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」と両者の罪を許している。ここに八内のキリスト教性が伺える。ただ、八内は先祖代々から受け継いでいる日蓮宗を信仰しているため、この時点においてはまだ八内の行為と聖書を直結させるには至らない。金沢で打ちこわしに参加した能美屋佐吉が死罪となり、見ず知らずの女たちが拝んでいる光景を指して、次男の平次郎に言う。

「平次郎。あの者たちのしんけんさがわかるか。」

「はい、みんないっしょうけんめいおがんどります。」

「血のつながりもなにもない、あかの他人のために、あれほどひたむきになっておる。見よいものよな。」 (p.57)

八内自身も見ず知らずの佐吉のために蓮華経を読んでいることからも、かつおが八内をもともと信心深い人柄であったということを示そうとしていることが分かる。

第二章では、藩政の中に賄賂が横行していて、藩校に通う子どもたちまでもが役につくことで得られる裏金について論議していることに対して、岡田雄次郎や長男多七郎に対して次のように述べている。

(岡田雄次郎との会話の中で)

「われわれ自身は、なんのやましいところもなけれど、なんとなげかわしいことか。」(p.81)

(多七郎に対して)

「にどとそんななかにはいるでないぞ。お役についてもうけるなどと、とんでもないくり話じゃ。」

八内は、学校で十歳そこそこの子どもたちがそんな話にむちゅうになるなど、もってのほかだと思った。このまま、ほうっておけない。しかし、そうはいっても、どうすればよいのだろう。 (p.84)

第三章では、諸外国からの攻撃に備えるために加賀藩においても海防策を講ずる八内の姿が描かれている。八内は、第一章同様藩主を中心とした国政が安定するよう奔走している。日蓮が説いた『立正安国論』に基づいた行動ともいえる。その後宮腰町奉行として任命されるが、そこで起きた長屋の火事では町人に交じって消火活動にあたっている。身分としては一番上の武士階級でありながら、町人と一緒に消火活動を行うことで町人たちから親近感、信頼感を得ている。聖書では、先頭に立つ指揮することを希望する者について、イエスは次のように述べている。

「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

(マルコによる福音書 9 章 35 節)

「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。」

(ルカによる福音書 22 章 26 節)

この聖句を受け、マルチン・ルターは『キリスト者の自由』において、キリスト者はすべての者の上に立つ自由な君主であると同時に、すべての人に奉仕する僕であると述べている。八内は、二千石以上の家禄を持つ身分でありながら民と苦楽を共にする生き方を選んでいる。そして、誰から何を言われようともその行動様式を変えようとしない。その徹底ぶりが八内の人柄を際立たせている。

また、水戸天狗党を鎮圧するため加賀藩の軍が越前国を向かう場面で、八内は大将永原甚七郎の補佐役として加わることになる。八内は、水戸勢の疲労困憊した姿に彼らにはもはや戦う気力が残されていないことを悟る。天狗党の本陣に入って見廻っていると、八内は一人の負傷した浪士に気づき傷の手当てをする。最初は独り言を呟いていた浪士も献身的な看護に涙声で感謝の言葉を口にする。八内は本陣に戻って負傷者のことを永原に伝える。この場面も聖書の「善きサマリア人」の話と重なるところがある。

「旅をしていたサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒をそそぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。」

(ルカによる福音書 10 章 33 - 34 節)

第四章では、上役からは「はりあいのない」、「あいそのない」と言われながらも家中の者に内緒で卯辰山開拓の人足として働きに出ている場面が出てくる。卯辰山の養生所や学校を作るため、無償

で人足と共に汗を流すことが自分の心身の健康法だと考えているところも八内の奉仕の精神を表わした箇所であると言える。

第五章では、明治維新が起り、藩の体制も様変わりする。藩士であった八内も家禄のほとんどを失い道具類を売って飢えをしのぐ生活を強いられる。さらに、前藩主の前田慶寧との別れを経験し、仕える対象を喪失した時期でもあった。そこに京都で知り合った内田と長年の付き合いである岡田よりキリシタンの監督役を要請される。内田の「ほんとうに信頼できる人に監督をしてもらいたいのでごわす。」との言葉に八内は快く応じる。

いざ現場に出てみると、肺炎になりかかった子どもが寝ていることに気づき、その子を背負って養生所に連れていく。間一髪で子どもが助かることになるが、そこでキリシタンと会話を交わすうちに、八内はキリシタンが置かれてきた悲惨極まりない状況を知ることになる。

> 八之門は、からだをかたくしてこんな話をきいていた。そんなにむごいせめかたをした者へのいかりが腹のそこからわいてきたが、それ以上に、目のまえにいる老婆たちがそんな苦しみをなめさせられながらも、いまもこうやって生きぬいていることに、ふかく感心していた。（中略）五百人のうち、たった三十人をぬいたみんなが、日蓮上人とおなじ苦しみにたえてきたとは、なんとつよい人たちだろう。（中略）八之門は、自分が監督でいるかぎり、そんな拷問などぜったいさせないぞと、かたく心にちかいをたてた。（p.313 - 315）

キリシタンの自己の信仰を貫く姿を伊豆や佐渡に流された日蓮上人と重ね合わせているところにキリシタンへの敬慕の念が芽生えていることを伺わせている。そして、八内は何とかキリシタンが自活できるよう支援したいと考えている。

キリシタンと同じ作業に携わることで彼らの信頼を徐々に得ていく八内は、田畑で群棲するドジョウのかば焼きを考案する。このかば焼きは繁盛し、キリシタンは貯えができるまでになった。そして、重三郎がぜうす（神）について説いたが、その時には八内はまだ自身の信仰について考えが及ばなかったが、先述したとおり、七年後宣教師トマス・ウィンから北陸でのクリスチャン第一号として洗礼を受け金沢アブラハムと呼ばれるまでになった契機につながっているということを示唆して物語が終わっている。

Ⅳ．キリスト教児童文学として

八内の半生を描いた『あらしの中の十七年』は、一人の信仰者が受洗するまで有様を描いた貴重な作品であるということができる。受洗の直接的な契機については、『長尾巻物語』には、八内はキリスト教がいかなる宗教か、正教か邪教かを究めようと、近くの材木町講義所で熱心に聴くうちに、「全きもの来るときは全からざるもの廃るべし」（コリント人への手紙 13 章 10 節）の御言に打たれて回心したとある。『あらしの中の十七年』では、詳細は明記されていないため、配流キリシタンとの関わりが間接的な契機となっているという説を支持しているような書き方になっているとみてよい。キリシタンが卯辰山において金沢の町民から湯のみを投げつけられたように、今度は八内自身が民衆から偏見の目で迎えられることになる。

> それ以来、石をぶつけられたり、いやがらせをされたりしながらも、ひたすら伝道につとめ、金沢アブラハムと尊敬されて、明治三十六年一月二十四日、みちたりた顔で天にのぼっていった。（p.342）

同時代の様子を描いたキリスト教児童文学作品に『浦上の旅人たち』[6]がある。『浦上の旅人たち』は浮浪児千吉が浦上のキリシタンに加わり、西南戦争を経験し、孤児院を経営し、最期は長崎で被爆死するといった数奇な運命を辿るとった内容である。今西はこの作品の創作過程について、あとがきに次のように述べている。

> はじめは、いわゆる〝浦上四番崩れ〟といわれる明治はじめのキリシタン弾圧事件だけを、史実を克明にたどって、ひとつの物語とするつもりでした。ところが、自分にも理解しきれない何かをさぐりさぐりしているうちに、物語はこんな形になってしまいました。（p.356）

浦上四番崩れや西南戦争、長崎への原爆投下についてはすべてが紛れもない事実であるが、架空の人物千吉の存在がなければそれぞれの出来事にはまったく関連性がない。それぞれの史実を別個に描いていたのでは児童文学作品として成立しな

い。読者である子どもはその先千吉はどうなったのか、自分の出生や浦上での「旅」の経験がどのような結果をもたらすのかを知りたくなる。今西は読者である子どもの興味に応えるべく、独自の想像力によって「点在する」史実を結び付け物語として構成するという手法をとった。これは、かつおの場合でも同様である。

ちなみに、『浦上の旅人たち』では、金沢におけるキリシタンについて次のように描かれている。

> プチジャン司教はまず横浜で外国人のために発行されている英字新聞の記者にあっていた。そして、浦上の流罪信徒たちがどのようにひどいめにあわされているか、はじめて報道されたのである。
>
> これを読んだイギリスの代理公使アダムスは、かねてから金沢、富山にも浦上の信徒たちが流されていることを新潟に駐在する領事ツループから聞いていたので、すぐその実情の調査を命じた。そして、ただちに、そのときの右大臣参上実美、外務卿沢宣嘉をおとずれ、その待遇改善を申し入れた。（pp.231 - 234）

この引用部分は、配流された地域の中でも金沢・富山が特にキリシタンに対して過酷な生活を強いていたということを表している。その後、現地を視察した検察官は各地で「ごちそうぜめ」に遭い、おざなりな報告書しか提出しなかったので、ツループが直接現地調査にはいったという記述が続く。

『浦上の旅人たち』では主人公千吉が被害者であるキリシタンの側に立って物語が展開するが、一方『あらしの中の十七年』では八内はキリシタンを監督する側に立ち、キリシタンの生活を支える側に立っている。こうした立場の違いはあるけれども、双方の主人公とも、その後の生活からキリシタンとのその関わりからキリスト教や信徒生活について少なからず影響を受けている。

関口（2005）は『浦上の旅人たち』の解説において、今西の次の言葉を引用している。

> カトリックである筈の浦上の旅人たちが、私の小説では随分プロテスタント的な信仰を持っているかもしれないが、私はそのようにしか書けなかった。（p.363）

関口は、物語のキリシタンが時代の流れに抗いながらただ黙々と労働することの根本を信仰に求めていることを指摘している。このプロテスタント信仰が浦上キリシタンの底流にあったのは、今西自身がその信仰に立って生活していたことに関連させている。では『あらしの中の十七年』にあるかつおには信仰があったのか。かつおが物語の中でキリスト教をどう捉えているのか。そしてそれがどのように作品に反映されているのか。幸いかつおが健在であるため、直接インタビューを試みることにした。

Ⅴ　作者へのインタビュー

１　執筆動機について

Q　明治維新を長屋八内という人物によって描きだそうとしたのはなぜか。

A　明治維新を書きたかったというよりは、長屋八内という人物を書いてみたかったということが直接の執筆動機で、時代の生き証人となった彼の半生を描くことが結果的には明治維新という時代を語ることにつながった。作家仲間に『浦上の旅人たち』を書いた今西祐行がいたが、1979 年から 80 年にかけて彼から金沢にも配流されたキリシタンがいたということを教えられ、執筆を勧められたということもある。また、八内自身には非常に明確な人物像が成立していて、没落の中にもキリシタンとの出会いを通して希望を見出していくたくましい姿を見ることができた。八内の生き方と後に書いた鈴木大拙の父親の生き方とが非常に似ているものがあると考えている。どちらも時代に翻弄されながらも自らの信念を貫こうとした人柄がうかがえる。

２　史実とフィクションについて

Q　作品は、歴史上の人物や史実をそのまま描き、エピソードとエピソードの間は筆者による想像である。具体的には、八内が高岡や宮腰の町内を歩きまわり町民の声を聞いたり、京都詰めでは偶然にも後の県令となる内田三之助に遭ったり、キリシタンと一緒にドジョウのかば焼きを作ったりする場面は作者の想像であると思われるが。

A　その通りである。すべて史実には残されていないため、想像によらざるを得なかった。大学では、古文書から事実を読み解く技術もさること

ながら、実際に町を歩いて確かめみるといった地理的視点も必要だと教わった。例えば、高岡の打ちこわしであるが、当時の地図を片手に実際に市街地を歩いて順路などを確認した。こうした追体験の中から八内という人物像が浮かび上がってきた。『天保の人びと』では、史実がわずかであったため、主人公の子孫からの聞き書きなどを依処して書いたが、『あらしの中の十七年』では史実によってある程度八内の明確な人物像ができあがっていた。

３　作品におけるキリスト教について

Q　八内が洗礼を受け信徒となった経緯には配流キリシタンとの関わりがあったからか。

A　今西と違って自分は信仰者ではないので、その後八内がどのようにキリスト教信仰に至ったかは書けなかった。しかし、『長尾巻物語』ではその経緯を確認している。しかし、指摘の通り、配流キリシタンとの関わりがあったからこそ信仰者となった後でも迫害に負けず信仰生活を送ることができたのではないかと考えている。長尾巻は、キリスト教社会運動家賀川豊彦に大きな影響を与えている。賀川が影響されたのは、長尾巻の信仰の背景には八内の存在が大きかった。

４　作者とキリスト教について

Q　『日本のキリスト教児童文学』などキリスト教児童文学に関する項を執筆しているが、自分の信仰との関連性はどうか。

A　『日本のキリスト教児童文学』で触れた『七一雑報』の中に北陸でのキリスト教が広まっていく様子が具体的に伝えられている。残念ながら、自分は信仰者ではなく、後に梅花女子大学に勤める際にも信徒でなくてもよいのかと聞いたことがある。ただ、礼拝の中で行われる祈りの時間などはとても貴重な機会であったと受け止めている。自分の信仰とはと聴かれれば、浄土真宗ということになるが、それほど宗教にこだわっているわけではない。

５　他作品・他作家との関連について

Q　先ほど今西祐行のことが話題となったが、作品と関連のある作家はいるか。

A　歴史児童文学作家としては、長崎源之助がいる。彼は長崎のことを書き続けた作家だが私同様キリスト教信仰には立っていない。だが、互いの作品を認め合う仲であり、互いに切磋琢磨する関係であった。松谷みよ子は、私が作品を発表する度に読後の感想に次回作への励ましを添えてくれた。

Q　長崎を書き続けた長崎源之助、岡山を始め配流キリシタン全体を書いた今西祐行、そして北陸のキリシタンを描いたこの作品で浦上キリシタンのほぼ全容が期せずして児童文学作品として明らかになったということか。

A　その通りである。

おわりに

浦上四番崩れを描いた作品は、いずれも配流キリシタンの生活がいかに悲惨な出来事であったかを後世に伝える意図で執筆されている。『浦上の旅人たち』の前半部も、史実に基づきながら、子どもの目を通した配流生活を描いている。しかし、『あらしの中の十七年』では、実直で忠誠心の篤い武士であった八内が激動の幕末から明治維新にかけて大きく価値転倒を強いられながらも、キリシタンとの関わりを通して再び生きがいを得て、やがて洗礼を受け迫害にもめげない信仰生活を送る姿が描かれている。すなわち、迫害にもめげずに耐え抜いたキリシタンに影響を受け自分のあるべき姿を取り戻したという、これまでにはなかった描き方がされている。この点では、他の作品と比較し極めて異質な内容となっていることが分かる。それは、カトリックとプロテスタントという教派の違いこそあれ、北陸においてはキリシタンが明治以降のキリスト教信仰によい影響をもたらしていることをも表わしているといえる。ここの一つの「信仰の継承」を見ることができる。

＜注＞

1 作品のタイトルは『あらしの中の十七年　－長屋八内のご一新』であるが、後述する際、便宜上サブタイトルを省略している。テキストは、1981 版を採用している。

2 長屋八内は後に長尾八之門と改名するが、便宜上八内に統一している。

3 内田三之助も後に政風と改名するが、２）同様三之助に統一している。

4 あとがきには『水戸浪士西行録』とあるが、石川県図書館協会から出版されている『水戸浪士西上録』のことではないかと考えられる。

5 以下、聖書の箇所を挙げてキリスト教からの影響をあるかのような記述が続く。この時点で八内がキリスト教の影響を受けているとは考えにくい。あくまでも、八内が思案している場面はすべてかつおの想像上の八内が考えていることである。だが、八内の人物像を描く際に、かつおがもともとキリスト教を受け入れる素地があったと考えられることから聖書を引用した。

6 作品の初出は1969年に実業之日本社から刊行されているが、あとがきを引用する都合上岩波少年文庫版のものを採用している。

＜引用・参考文献＞

1）石川県編（1927）『石川県史』
2）石川県児童文化協会（1966）『こども石川県史』石川県児童文化協会
3）石黒文吉『加賀藩史料』（1929）
4）磯田道史（2003）『武士の家計簿　『加賀藩御算用者』の幕末維新』新潮新書
5）今西祐行（2005）『浦上の旅人たち』岩波少年文庫
6）浦川和三郎（1943）『浦上切支丹史』国書刊行会
7）かつおきんや（1981）『あらしの中の十七年』偕成社
8）かつおきんや（1970）『安政五年七月十一日』牧書店
9）かつおきんや（1972）『五箇山ぐらし　続天保の人びと』牧書店
10）かつおきんや（1969）『天保の人びと』牧書店
11）かつおきんや（1980）『山から声が降ってくる』偕成社
12）勝尾金弥（1999）『伝記児童文学のあゆみ　－ 1891から1945年－』
13）勝尾金弥（1977）『黎明期の歴史児童文学　『歴史読本』から『日本お伽噺まで』』アリス館
14）金沢こども読書研究会（2000）『かなざわ偉人物語３　教育や福祉の分野に活躍した人びと』金沢市立泉野図書館
15）金沢市史編さん委員会（1969）『金沢市史』
16）木越邦子（2006）『キリシタンの記憶』桂書房
17）陸義猶（1899）『乾州岡田君行状』
18）高岡市史編纂委員会（1959）『高岡市史』
19）富岡幸一郎（2006）『講座　日本のキリスト教芸術３　文学』日本キリスト教団出版局
20）中沢正七（1936）『歓喜の聖徒　長尾巻物語』一粒社
21）日本基督教団金沢教会百年史編纂委員会（1981）『金沢教会百年史』
22）日本基督教団金沢教会百十年史編纂委員会（1997）『金沢教会百十年史』
23）日本児童文学学会・冨田博之・上笙一郎編（1995）『日本のキリスト教児童文学』国土社
24）三俣俊二（2000）『金沢・大聖寺・富山に流された浦上キリシタン』聖母文庫
25）森山誠一（2003）『加越における浦上キリシタン配流事件の史実　－同時代史料の整理－』金沢星稜大学論集　第36巻　第3号
26）森山誠一（2003）『加越における浦上キリシタン配流事件の史実（続）』金沢星稜大学論集第37巻　第1号
27）F・H・W・Castellan（1973）『石川のキリシタン』